

私の子ども時代(8)



昭和の初めの頃の
幼児の過ぎし日を振り返り

陳 繡

明治28年の日清戦争後、第二次世界大戦終了までの六〇年間、台湾は日本の植民地でした。陳さんは日本で生まれ、台湾の人でありながら日本人として教育をうけ、育ちました。戦後、日本から離れ、今度は台湾と中国という二つの国の間で、精神的につらく苦しい時代もすごしたそうです。

今回は幼い時をすごした日本での良き時代の思い出を、陳さんご自身に綴っていただきました。
(編集部)

記憶の薄れぬ間に書いておきましょう。生まれ 語を、一日も忘れていません。

出てから母国語「国語」と呼んでいた言葉(日本 私は大正十五年十月六日に東京牛込区に生ま

れ、間もなく昭和元年になり、数少ない大正十五年・昭和元年に生まれた者となりました。

父は慶應大学法学部政治経済学部に在学中、母は近くのお茶水おチヤウスイ（本当はお茶の水ですが母はよくお茶水と話す）に行っていました。すぐ結婚育児のため、「ほとんど勉強も出来ず年取っちゃった」と何時もこぼしていましたが、翌年に妹が出来、母はいよいよ勉強を断念せざるを得なくなりました。

その昭和二年は東京地下鉄、浅草より銀座までの「銀座線」開通、地上は「市電」いわゆる「チンチン電車」の開通。そのお祝いに、紙で作った色とりどりのお花や金、銀、赤、緑、黄のモールで華やかに飾られた電車がコトコトチンチンと走り、時にはお花やモールを落としながら家の前を通りました。そのモールやお花を拾い、私は夢中になって電車の後を追ひ、「迷子」になって大騒ぎになった事もありました。思えば非常に

のんびりしたあの頃でした。「あつ、小さい女の子が線路を歩いている」とお巡りさんに発見されました。「迷子の迷子の子猫ちゃん」ではないが、何を聞いても分かる筈はなく、お巡りさんに「お家の近くには何があるかしら」と聞かれ、私はうる憶えの「大きなお風呂屋さんと材木屋さんがある」（これも私にとっては大きな事柄に出会った場所なので、特に、よく憶えていたので）と答え、お巡りさんはそれを起点に探しつづ家うちの近くまで自転車であつて帰って来て下さいました。家では近所中大騒ぎ。近所には何故か幼い子供は私一人だけ。そのため皆さんよく可愛がって下さりお菓子を頂いたりしたので、夕方になって家へ帰って来ないし近所にも見当たらないと、皆は夕飯の支度の手を止めて、迷子を探している時に、お巡りさんに連れられ帰って来たとか。その時母は近くのお稲荷さんに手を合わせ、一生懸命祈っていた所でした。無事、大騒動

一件落着。お騒がせして申しわけございませんでした。今更ながら深々と頭を下げます。

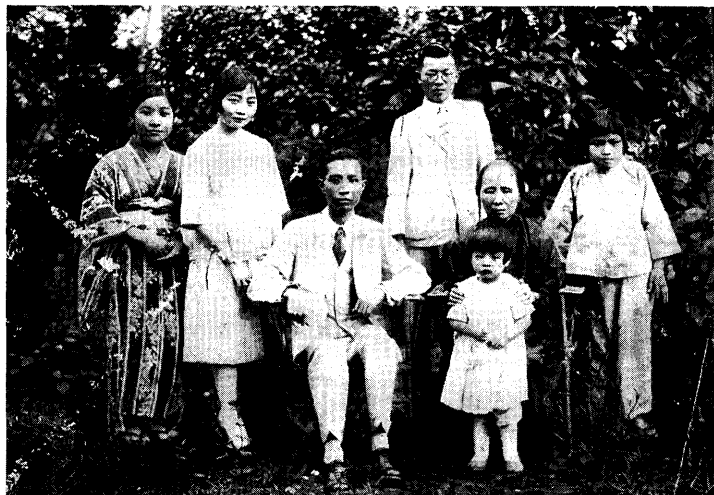
お風呂屋さんの大事件とは、お風呂屋さんから出火、大火事になり火の手が家まで来そうなので逃げ回り大恐怖に会ったこと。材木屋さんの件は材木屋の周りで遊んでいた材木がバラバラと倒れて来て私は下敷きになり、九死に一生を得たとはオーバーですが、倒れた材木と材木の間小さな私は入り助かった事。これも勿論大騒ぎ。材木屋さん、お風呂屋さん、私にとっては恐ろしい所、幼児の頃に出会った恐怖は常に付きまとうものです。材木屋の材木が立てかけてあるのを見ると、今でもこわく、遠く離れて歩きます。お風呂屋さんを見ると紅蓮ぐんれんの炎を思い鳥肌が立つのです。

当時、新しくできた電車の行き来する道路はとも広く広く見え、向かい側へは中々行かれない位でした。その道路に面した玄関はとも明る

く、格子戸をガラガラと開けると二段上がり左右へと廊下があり、向かって右手はすぐに階段、二階へです。大きな畳の広間を通り縁側に手すりがあった、階下のお庭が一望出来、背の高い生け垣がぐるっと囲ってお向かいの家は見えません。縁側に籐椅子と机があり、その椅子に登ってみても見えないのです。

冬になると北側の渡り廊下の窓で雪兔、赤い丸いお盆に雪で白い兔を作り、南天の赤い実をお目々にささの葉を耳にと母が雪兔を作ってくれた光景もはっきり昨日の様に。妹の小さなお手々と「兔ちゃんね」と遊んだり、おイネさん（働いていたお手伝いさん）と一緒に雪道を歩いては大喜びでした。鈴のついた下駄は雪でつまってならなくなり、急いで家へ帰り、またはきかえて、と何回も行ったたり帰ったり、大人たちを困らせたとは何時も話していました。

夏になると葉山の別荘へ行き、海辺で遊んだりしました。母とお揃いのゴム靴、オレンジに黒の模様、海水着も同じ色、黒に斜め横に太いオレンジ色の配色でした。別荘では父の従兄弟達も一緒に夏を過ごしたりしました。また、時々台湾へ帰省する事もありました。当時は四泊五日の船旅。船は大阪商船、三井商船等の高千穂丸、蓬萊丸、三、四万噸級の大きな客船でした。横浜や神戸から乗船します。船内はずーっと向こうまで赤い絨毯が敷かれていました。船室の白い丸い窓から波がパッサーツとガラスに当たる。白い階段を真っ白な制服姿のボーイに手をつないでもらい、甲板で波しぶきを見たりです。でも三度の御食事に大ホールに行く時は必ず着替えさせられるのは嫌でした。面倒ですね、朝食の時はきちんとした清潔な服を、昼は又違った少しスポーティな、例えば私でしたらセーラー服、夜はヒラヒラとフリルのついたドレスシイな服、靴下、靴も全部替えて



▶昭和四年頃、東京にて。左より、おイネさん、母、父、叔父、祖母、私、雇人。

と、なんて面倒なことでしょう。でも楽しい音楽

を聞いているとご機嫌になります。家に置いてきた大事な紅い蓄音機を思い出します。明るい紅色で高さ二十センチ正方の箱型で、蓋を上へあげるると下に降りて来ない様になっていますので、その蓋の内側にしまっているレコードを掛けます。大きいレコードは二十センチ位で小さいのは十センチ位。少し暗い赤い色や明るい紅やオレンジ色のとあり、歌のあるのや、歌のない音楽だけのがあり、私は歌があるのが好きでした。「お手々つないで」「ポッポポ鳩ポッポ」「春が来た」「さくらさくら」「金らん緞子の花嫁人形」「狐の嫁入」とか、音楽の方は「ドナウ川のさざ波」「子守歌」「乙女の祈り」とか、私にはむずかしくて（でも後で返って好きになりましたが）。手で回すので時々音が眠ってしまいそうになり、急いで手回しを回しますと元気を出し、また歌い出す昔の蓄音機です。父が音楽が好きでしたので音楽の教

育です。

父はヴァイオリンの名手でしたが、演奏会には出ませんでした。自分で楽しむものだからと何時も話していました。私は子守歌に「トロイメライ」「スーベニール」を聴いて大きくなりました。名曲、名演奏に何時も聴きほれていました。

船旅も台湾の基隆港に安着。賑やかなお祭騒ぎの様なブラスバンド等のお出迎えです。夜行で台中へ帰り、母の実家の方々のお出迎えの後、「五分車」というミニ機関車（これは製糖会社の砂糖キビを畑から工場へと運搬する交通機関です）で、一路といっても小一時間位で霧峰の我家です。そして一、二か月過ぎました東京へと、父の勉強、修士を取るためとか、東京―霧峰とよく行き来しました。勿論、母も私も子供です。そしてまた東京の生活が暫く続きます。やがて昭和四年になり私も少しは物も分かりかけて来ました。父母に連れられ、初めて飛行機のショーの様なもの

を見ました。双翼の白赤のシマ模様の飛行機を父は赤トンボといい、それが上へ上ったり急に降りたり、クルリと回転したり、皆はワアワアと大騒ぎでした。ある時、もう日暮れて薄暗い頃に父母と一緒にドイツの飛行船（ツェッペリン号）の東京訪問を見に行きました。グレーの大きな船体はゆったりと着陸、非常に印象的でした。

東京の生活は何時も一つ年下の妹と一緒にでした。近所に小さい子がいないからでしょう、ほとんど家の中の遊びです。勿論お人形さん、ままごと、お庭から赤い椿、タンポポやら、お花を取ったりして。時々電車ごっこ、父母もおイネさんも一緒に一本のひもの中に入り「チンチンゴトゴト」と。或いはおもちゃの電車をネジをかけグルグルと線路を回り「赤信号」で止まったり、駅でも止まります。カンカンカンと鳴らして止まったり走ったりです。たまには、まりつき、ゴムまりです。「テンテンテンまり」と歌いながら、お

じゃみ（お手玉のこと）も「おーさらいっ」といながら、或いは折紙でいろいろ折ったりと、幼児の遊びは何時の時代も同じですね。

私は時々家の庭の生垣をかきわけて、隣のお庭まで勝手によく入り込みました。生垣をぬけてすぐ小川があります。水は見えないのですが、一寸深く、そのため家からお隣まで橋で渡ります。橋といっても丸太を二本両側に、人の歩く真中には板を通してあり、少し土をもち、草も生えてます。大分前からあった橋でしょう。橋を渡り遠慮なく、図々しくか、人様のお庭に入り込み、青々とした芝にふみ入りますが、待つて下さっていたのか、藤色の着物に長いエプロンの女の人が来て私を抱き上げ、側の大きな石の上に座らせて下さいました。その後に洋装の上品な女の方は、「白い紙に包んだ物を私の片手とポケットに入れ「おあがり」といい、ニコニコと私を見てはエプロンの女の人に何か話しています。私は半紙を開

けると、まあなんてきれいなお菓子、椿の花の形と手まりのあめ……。私は食べるのが惜しくて何時までも持っていました。家に帰り母に話すと母はびっくり、早速御礼に行ったとか。でもこれがきっかけでよくその方のお家へ生垣をくぐっては行ったものでした。行かない日は向こうさんから迎えに来て下さいます。やがて父の卒業。母もお腹が大きくなり、二人の子供と次の子が出来るので、とても一人ではとって、三番目の子は台湾で産むことに決まり、帰台後、様子を見てまた東京へ来たいと話していました。

父は九歳から東京のある学校長の御一家に預けられ、教育をうけ、年に何回か帰省する事もありましたがほとんど東京で暮らし、もうすっかりなれたという心境でしょう。

しかし母は反対に東京での生活は心細いとこぼしていました。当時父も母も台湾では一、二の名家。経済的には心配ないのですが、母の実家は家

家族でそれはそれは賑やかで華やかでしたので、東京での暮らしは心細かったのでしょう。結局、霧峰にとどまる事になりました。霧峰も台中にとらず大家族。母は家事に追われる事なく、子の養育に専念出来ました。そして私は霧峰で大勢の人に囲まれ、小学校時代をすごすことになりました。その後の台湾での生活は、またの機会に残すことにしましょう。

(神奈川県在住)

